

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730522

研究課題名(和文) 共通の効果測定による対人コミュニケーションに関するトレーニングや体験型課題の整理

研究課題名(英文) Evaluating training and tasks through practical experience of interpersonal communication by using common assessment tools.

研究代表者

小川 一美 (OGAWA, KAZUMI)

愛知淑徳大学・心理学部・教授

研究者番号：70345875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、形式および効果という観点から、多数存在している対人コミュニケーションに関するトレーニングや体験型課題を整理することであった。効果測定として、解読スキルに関してはスキルの自己評価を使用することは妥当ではないことが示された。一方、記号化スキルに関しては自己評価尺度による効果測定も利用可能であることが明らかとなった。また、トレーニング効果を左右する要因も明らかとなった。以上より、効果測定結果が公開されている既存のトレーニングについて、これらの観点からトレーニングの効果性を再判断できることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evaluate assessment tools through methodological comparison within interpersonal communication training and tasks in terms of form and effectiveness. Self-evaluation of decoding skills turned out to be inappropriate as assessment tools. Whereas regarding encoding skills, it was shown that using self-evaluated scales was produced higher validity in test results. Moreover, factors to influence effectiveness of training were identified. After evaluating existing training and its presented data regarding effectiveness, it was suggested that we can reexamine the effectiveness of training from these points of view; namely validity of assessment methods and training methods.

研究分野：社会心理学

キーワード：対人コミュニケーション ソーシャルスキル スキルトレーニング 効果測定 解読 記号化

1. 研究開始当初の背景

近年、コミュニケーション力やコミュニケーション能力といった言葉が、中央省庁、企業、マスコミなどをはじめ多様な場面で頻繁に使用されている。今、人々には相互作用の基本ともいえる対人コミュニケーションを適切かつ効果的に行うことが求められている。

対人関係能力の向上に対してソーシャルスキル・トレーニングやソーシャルスキル教育の有効性が示されているように（相川，2009 など），対人コミュニケーションの適切性と効果性を高めるためには，トレーニングなどの働きかけを行うことが有効であると考えられる。なお，ソーシャルスキルという概念が想定しているのは全般的な対人的相互場面であるが，適切かつ効果的な対人コミュニケーションとはコミュニケーション場面に限定したものであり，ソーシャルスキルの一側面であると考えられる。

ソーシャルスキル・トレーニングの中には，コミュニケーション行動に焦点を当てたトレーニングが多数あり，これらはまさに本研究で着目する対人コミュニケーションに関するトレーニングである。その他にも，ラボラトリー方式の体験学習の中で紹介されているもの，人間関係づくりトレーニングとして紹介されているもの，対人スキルズ・トレーニングとして紹介されているもの，コミュニケーション能力を磨くための課題として紹介されているものなど，目的や形式は異なるものの内容だけで判断すれば対人コミュニケーションに関するトレーニングに該当するものは非常に多く存在している。しかし，各トレーニング間で独自の効果測定が行われている為，どれが効果的であるかが不明瞭であるということや，類似した内容のトレーニングや課題が存在しているにも関わらずそれぞれの相違点や共通点が不明確であるというのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では，適切な効果測定方法を明らかにし，既存の対人コミュニケーションに関するトレーニングや体験型課題について，形式および効果という軸から各トレーニングや課題を整理し，トレーニング実施希望者に有益な知見を還元することを目的とする。

既存のトレーニングにおいては，効果測定がなされていても，測定している側面が研究によって異なっていたり，行動的側面を測定すべきにも関わらず自己評定という形式のみで済ませていたりすることがある。これまで，ソーシャルスキルの高さ与会話行動の関連を検討する研究もいくつか行われている。ただし，ソーシャルスキルの高さと言っても，本人が自分を評定する自己評定法が用いられることがほとんどであった。しかし，ソーシャルスキルとは，対人場面において適切かつ効果的に反応しているかというものであ

るため，自己評定で測定しているものが対象者のソーシャルスキルを正しく捉えているとは言えない場合がある。たとえば，自己を適切にモニターできない人は，対人場面においても適切かつ効果的に反応することが困難であると予測できるため，ソーシャルスキルは低いと考えられる。しかし，自己を適切にモニターできない人は，自分は適切かつ効果的な反応ができていないと認知し，自己評定においてはソーシャルスキルが高くなることもあるかもしれない。相川（2009）も，ソーシャルスキルという概念の特性から考えても，個人のソーシャルスキルの程度を自己評定尺度だけで判断するのは危険であると指摘している。また，自己評定と他者評定がかけ離れた結果になったという研究もいくつか報告されている。そこで本研究では，効果についての測定方法の適否を確認するため，対人コミュニケーションの解読と記号化という基本スキルに着目し，基礎的な実験を行う。

(1) 解読スキルに着目して

Rosip & Hall (2004) は，非言語的の手がかりについての知識の量が読み取りスキルの個人差に影響を与えると考え，非言語的の手がかりについての知識量を測定する Test of Nonverbal Cue Knowledge (TONCK) を開発した。また，相川（2009）のソーシャルスキル生起過程モデル v.3 では，生起過程の中心に社会的スキーマが想定されており，社会的スキーマが相手の反応の解読，対人目標の決定など全ての過程と相互に影響を与え合っている。したがって，知識の体制化されたものが社会的スキーマであるとする，知識量はソーシャルスキルとしての対人行動や認知過程に影響を及ぼすと考えられる。

相手に対する感情を適切に表出し，またそれを認知することは，円滑な対人関係を展開していく上で欠かすことができない（大坊・高橋・磯・橋本，2001）。つまり，表情解読はソーシャルスキルとしての対人行動や認知過程の中でも，基本かつ重要な過程であると言える。そこで(1)では，この表情解読に焦点をあて，ノンバーバルコミュニケーションに関する知識量と自己評定による解読スキルの高さが表情解読の正確さにもたらす影響を検討する。そして，トレーニングの効果測定として頻繁に用いられるスキルの自己評定という手法が妥当であるかを確認する。

(2) 記号化スキルに着目して

対人コミュニケーションは堀毛（1994）が指摘するように，基本的な過程に絞っても記号化，解読，統制といった3つの過程が存在する。そこで(2)では，ノンバーバルコミュニケーションに関する知識量と記号化との関連を検討する。記号化とは，送り手が伝えたい情報を言語符号や非言語符号に変換する作業のことである（小川，2010）。本研究では符号の中でもノンバーバル行動に着目

し、初対面の二者で会話をする際のノンバーバル行動の表出特徴を検討する。ソーシャルスキルの自己評定と知識量のいずれがノンバーバル行動の表出特徴を予測できるかを検討することで、自己評定という手法の妥当性についても考察する。

(1)から、表情解読行動に影響を及ぼすのは、ソーシャルスキルの自己認知よりもノンバーバルコミュニケーションに関する知識量であることが明らかにされた。しかし、解読は個人内で行われる認知過程であり、記号化は他者に対して働きかける行動過程であるため、知識量が及ぼす効果も異なることが考えられる。また、ソーシャルスキルの自己認知についても、解読スキルの自己認知と記号化スキルの自己認知では、正確さが異なる可能性が考えられる。なぜなら、自己の内的な認知活動である解読では、日頃から自身の解読の正確さを知りうる機会が少ない。一方の記号化という過程であれば、日頃から他者からフィードバックを受ける機会があるため自己認知が妥当である可能性も考えられる。

(3) トレーニングの成果を高める要因の検討

ソーシャルスキルを向上させるトレーニングを実施する際には、実施環境や受講生の意識に留意する必要がある(太幡, 2012)。トレーニングの成果を高める要因を検討し、その結果に基づき効果測定結果が公開されている既存のトレーニングを再評価することができると考えられる。そこで、トレーニング受講者を対象に面接調査を実施し、トレーニングの成果を左右する要因の抽出を行うこととした。

3. 研究の方法

(1) 解読スキルに着目して

女子大学生 49 名を対象に表情解読実験として、強制選択法による実験と視覚的評価法(Visual Analog Scale: VAS)による実験を行った。いずれの実験も、Apple 社の iPad を縦置きにした状態で、上半分に顔表情画像を呈示し、下半分にそれぞれの評定用ボタンを呈示した。強制選択法では、基本 6 表情である「喜び」「悲しみ」「怒り」「驚き」「恐怖」「嫌悪」と、「中立」の 7 種類から、呈示された顔表情画像に最もよく当てはまると思われるものを 1 つ選択させた。VAS では、顔表情画像に各表情がどれくらい表れていると思うかを、強制選択法と同じ 7 種類について 0~100 の範囲でボタンをスライドさせる方法で評定させた。刺激とした顔表情画像は、ATR 顔表情画像データベース DB99 に収録されている画像のうち、女性モデル 2 名 (F03 および F16) の正面顔データを用いた。Neutral, Happy (mouth open), Sad, Angry (mouth close), Surprised, Scared, Disgusted の 7 種類の表情について各 1 枚の画像であった。各評定方法において、人物 2 名×顔表情画像 7 種類×2 回をランダムに呈示し、合計 28 回の評定を求めた。

ノンバーバルコミュニケーション (NVC) に関する知識テストと、ソーシャルスキルの自己評定を実施した。知識テストは、日本語版 TONCK (TONCK49; 河野・篠田, 2008) から表情やパラ言語といったノンバーバルコミュニケーションに関する項目で、正答率が著しく低くなく正解の根拠が明確である 16 項目を選択し、文意をわかりやすくするため表現を一部修正し使用した。さらに、顔面筋動作の Action Unit (Ekman & Friesen, 1978) を参考に、基本 6 表情を記述する 6 項目も追加した。22 項目について、「各文章が一般的な人の行動として正しいと思うかどうかを教えてください」という教示のもと、○か×で回答させた。ソーシャルスキルの自己評定は、相川・藤田 (2005) による成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を採用し、5 段階で評定させた。本研究では下位尺度である「解読」の 8 項目の合計点を分析に用いた。

(2) 記号化スキルに着目して

実験参加者は、女子大学生 56 名、男子大学生 16 名であった。実験参加者は初対面の 2 人で 1 組の会話者ペアに構成された。実験参加者には、実験者から指示があるまで参加者同士で会話をしないよう依頼した。実験室に入る前に、木村・余語・大坊 (2005) の「会話相手との関係性」の質問項目を呈示し、初対面同士かを確認した。全てのペアで両者の回答が一致し、「全く知らない」もしくは「顔を見たことがある」を選択したため、全参加者を分析の対象とした。実験参加者は実験室に入室後、84cm の幅の机を挟んで向かい合って着席した。実験者が退室している間、2 人で自由に会話をしてもらった実験であることや、倫理面に関する配慮などについて説明し、会話の様子をビデオカメラで撮影することの承諾を得た。会話時間は 8 分間であった。会話終了後、お互いの姿が見えない場所に移動させ、調査用紙に回答を求めた。調査用紙は、次の①~⑤で構成されていた。①会話満足度：実験参加者の会話満足度を測定するために、木村ら (2005) の会話満足度尺度から項目を抜粋して使用した。これは 18 項目 3 因子 (会話調整因子、会話集中因子、ごこちない会話因子) から成る尺度であったが、各因子から因子負荷量の高かった上位 2 項目ずつを本研究では採用し、8 段階で回答を求めた。②ノンバーバルコミュニケーションに関する知識：対人コミュニケーション場面におけるノンバーバル行動に関する知識を測定するため、36 項目について「各文章が一般的な人の行動として正しいと思うかどうか教えてください」とし、正しいと思うものには○、わからないと思うものには△、正しくないと思うものには×を付けさせた。日本語版 TONCK (河野・篠田, 2008) から、対人コミュニケーション場面における視線、ジェスチャー、顔面表情、うなずきに関する項目を採用した。ただし、河野・篠田 (2008) において、正答率が著しく低いもの、内容の信憑性

が確認できないもの、表現が曖昧なものは削除した。そして、文意をわかりやすくするために表現を一部修正した。さらに、(1)では、基本6表情に関する知識を測定するため視覚的に識別可能な顔面筋動作の Action Unit (Ekman & Friesen, 1978) を参考に項目を新たに追加しているが、(2)でもこれらを採用した。そして、以上では網羅できていないと考えられるノンバーバルコミュニケーションについて、独自に7項目を追加した。③ソーシャルスキルの自己認知：対人コミュニケーション全般に関わる能力を示す概念を測定する尺度として堀毛 (1994) が開発した ENDE2 を採用した。ENDE2 は、記号化、解読、統制という基本的スキルと呼ばれるものから成り、15項目について5段階で回答を求めた。④非言語的表出性の自己認知：対人場面における非言語的表出性を測定するために、Friedman, Prince, Riggio & DiMatto (1980) による感情表出的コミュニケーションテスト (Affective Communication Test : ACT) を、大坊 (1991) が日本語版に改訂した尺度を採用した。13項目について、9段階で回答を求めた。⑤実験参加者の性別、年齢、学年についても回答を求めた。

(3) トレーニングの成果を高める要因の検討

太幡 (2016) のトレーニングを15回受講した、大学生18名 (男性15名、女性3名) に対し、1人あたり約30分の半構造化面接を実施した。“スキルトレーニングをもっとやりやすくするには、どのようにしたらよいと思うか” について、トレーニング実施者、参加者、内容、環境ごとに、理由も併せて自由に回答するよう求めた。

面接の結果、18名の対象者から、170の発言が得られた。得られた発言に対し、心理学を専門とする大学院生2名が、KJ法 (川喜田, 1967) を用いて分類した。続いて、それぞれの発言を、社会心理学を専門とする教員と大学院生が別々に、KJ法で作成されたカテゴリーに改めて分類した。一致率は85.9%であった。分類されたカテゴリーが不一致だった発言に対しては、社会心理学を専門とするもう1名の教員を交え3名で協議し、最終的に全ての分類を一致させた。

さらに、トレーニングを1回受けた者18名、8回受けた者13名にも同様の半構造化面接を行った。

4. 研究成果

(1) 解読スキルに着目して

NVCに関する知識量と解読スキルの自己評定と表情解読行動の相互関連性を検討するため、相関係数を算出した。知識量と解読スキル自己評定には有意な相関関係は示されなかった ($r=.087, ns$)。しかし、知識量とVASによる正答数には有意な正の相関関係が示され ($r=.353, p=.013$)、知識が多いほど表情画像が呈示された際にその表情が多く表れていると正しく解読することができて

いたと言える。一方、解読スキル自己評定と強制選択による正答数の間には負の相関傾向が示された ($r=-.243, p=.092$)。つまり、解読スキルの自己評定が高いほど強制選択による表情解読行動が正確でないという結果であった。なお、知識量と強制選択による正答数、解読スキル自己評定とVASによる正答数の間には有意な相関関係は見られなかった ($r=.168, r=.054$)。

次に、強制選択による正答数を基準変数、NVCに関する知識量と解読スキル自己評定を説明変数とした強制投入法による重回帰分析を行ったところ、重回帰式は有意にならなかった ($F(2, 46)=2.418, ns, R^2=.095$)。しかし、VASによる正答数を基準変数にしたところ重回帰式が有意となり ($F(2, 46)=3.298, p=.046, R^2=.125$)、NVCに関する知識量からVASに対する標準偏回帰係数が有意となった一方で ($\beta=.351, p=.015$)、解読スキル自己評定からVASに対する標準偏回帰係数は有意にはならなかった ($\beta=.023, ns$)。

また、参加者を知識量によって3群に、解読スキル自己評定の値によって2群に分け、VASに対して知識量と解読スキル自己評定による2要因分散分析を行った。Figure 1に示したように交互作用が有意となり、解読スキル自己評定が高くて知識量が少ないと知識量が多い群より有意にVASの得点が低いことが示された。また、解読スキル自己評定が低くても知識量が多ければ、VASの得点は高くなることも示された。

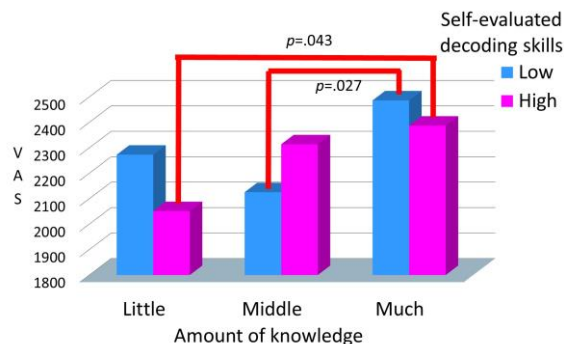


Figure 1 VASに対する知識量と解読スキル自己評定の効果

以上の結果より、表情解読行動に影響を及ぼすのは、解読スキルの自己評定よりNVCに関する知識量であることが明らかとなった。ソーシャルスキルの自己評定は他の手法に比べ測定が簡便であるという利点のため、非常に多く用いられている。しかしこれまで、自己評定で測定しているものが対象者のソーシャルスキルを正しく捉えているとは言えないのではないかといった疑問が多くあげられてきた。相川 (2009) も、ソーシャルスキルという概念の特性から考えても、個人のソーシャルスキルの程度を自己評定尺度だけで判断するのは危険であると指摘している。本研究の結果からも、自己評定という手法をスキルの実態測定として使用するこ

との妥当性の問題が示されたと言えよう。

(2) 記号化スキルに着目して

ノンバーバルコミュニケーションに関する知識量およびソーシャルスキル自己認知と、二者間会話時のノンバーバル行動の表出の相互関連性を検討するため、相関係数を算出した。解読スキルと視線時間および傾き量の間には正の相関傾向が確認され、解読スキルの自己認知が高いと、視線時間と傾き量が多いという傾向が示された。解読スキルとは、相手の意図や感情を正確に読みとるスキルであることから(堀毛, 1994)、自分は解読スキルが高いと認知している人は相手から多くの手がかり情報を得るために視線を向ける時間が長くなると考えられる。また、傾きを多く行うことは聴くスキルの特徴であるとされており、解読スキルも聴くスキルの一部であるとされていることから(相川, 2009)、両者に正の相関傾向が示されたと考えられる。

統制スキルと笑顔時間の間にも正の相関傾向が確認された。統制スキルとは、感情をコントロールするスキルであることから、自分はいま感情をコントロールできると認知している人は、実際に初対面の相手に対して望ましい表情であるとされている笑顔で会話を行うことができるということであろう。

記号化スキルはいずれのノンバーバル行動とも相関を示さなかったが、記号化のなかでも非言語的表出性に限定されたACTは視線頻度、笑顔頻度と有意な正の相関関係を示した。非言語的表出性が高いという自己認知をもっている人は、相手に視線を向ける回数や笑顔を表出する回数が多いということであり、非言語的表出性に関して人は正確な自己認知ができるということを表しているとも言えよう。

(3) トレーニングの成果を高める要因の検討

KJ法の結果、発言は17カテゴリーに分類された。その17カテゴリーを小分類とし、社会心理学を専門とする教員、大学院生でさらに5つの大分類に振り分けた。その結果、トレーニング実施者、トレーニング参加者、トレーニング内容、トレーニング環境、参加者を取り巻く人間関係という5分類が抽出された。栗林・中野(2007)はトレーニングの効果を左右する要因として、参加者の意欲の要因、参加者の構成や雰囲気、プログラムの要因を挙げている。本研究の結果は、栗林・中野(2007)の挙げた要因の内容を具体的に抽出したものと位置づけられる。加えて、トレーニング実施者の要因、トレーニング環境の要因がトレーニング効果を左右するものとして新たに示された。

次に、トレーニングを1回受けた者18名、8回受けた者13名、15回受けた者18名の結果に基づき、トレーニング回数によってトレーニングの成果を高める要因が異なるかを検討した。主な結果として、以下の三点が挙

げられる。(a)トレーニング実施者について、1回では実施者との関係、15回では実施者の能力に関する事柄が多く言及された。(b)トレーニング内容について、1回では参加者の意欲を高めることが多く言及されたものの、15回では言及が少なかった。(c)参加者を取り巻く人間関係について、1回では異質な属性の者と参加すること、15回では親密度が高い者と参加することに関する言及が少なかった。これらの結果から、トレーニング回数によって社会的スキルトレーニングの成果を高める要因には違いがみられることが示唆された。

また、トレーニング回数と参加者のトレーニングに対する評価の関係も検討した。トレーニングに対する評価をトレーニング回数により比較したところ、“トレーニングは楽しかった”は回数による有意差は見られなかった。“トレーニングは自分に必要だと思った”は、1回よりも15回の方が有意に得点が高かった($F(2, 46)=4.55, p=.016, \eta_p^2=.17$)。1回 $M=77.6, SD=16.0$; 8回 $M=84.0, SD=7.2$; 15回 $M=90.0, SD=10.9$)。つまり、感情的な側面ではトレーニング回数による違いは見られないものの、回数が多くなると必要だと思ふという認知的評価は高まることが示された。次に、各得点の高さと各発言の有無(0=発言無し, 1=発言有り)の関連を検討するため、トレーニング回数ごとに点双列相関係数を算出した。8回、15回になると“トレーニングは楽しかった”と各発言の間に有意な関連はなくなった。一方、“トレーニングは自分に必要だと思った”では15回になると有意傾向であるが複数の発言と関連が示され、トレーニング実施者や内容、人間関係という要因が認知的評価に影響を及ぼす可能性が示唆された。

(4) まとめ

以上の(1)から(3)より、効果測定として、解読スキルに関してはスキルの自己評定を使用することは妥当ではないことが示された。一方、記号化スキルに関しては自己評定尺度による効果測定も利用可能であることが明らかとなった。また、トレーニング効果を左右する要因も明らかとなり、トレーニング回数によっても留意する要因が異なることが示された。これらの結果を参考に、効果測定結果が公開されている既存のトレーニングについて、トレーニングの効果を再判断することができる。

<主な引用文献>

- ①相川 充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要1部門, 56, 87-93.
- ②大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定: ACT 尺度の構成 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.
- ③Ekman, P. & Friesen, W. V. (1978). *Facial action coding system: A technique for the*

measurement of facial movement. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.

- ④Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatto, M. R. (1980). Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.
- ⑤堀毛一也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- ⑥木村昌紀・余語真夫・大坊郁夫 (2005). 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検討 感情心理学研究, 12, 12-23.
- ⑦河野義章・篠田直明 (2008). 日本版TONCKの開発 東京大学紀要総合教育科学系, 59, 145-154.
- ⑧Rosip, J. C. & Hall, J. A. (2004). Knowledge of nonverbal cues, gender, and nonverbal decoding accuracy. *Journal of Nonverbal Communication*, 28, 267-286.
- ⑨太幡直也 (2012). 大学生のチームワークに関するスキルを向上させるトレーニングの有効性 常盤大学人間科学部紀要 人間科学, 29, 59-69.
- ⑩太幡直也 (2016). 大学生のチームワーク能力を向上させるトレーニングの有効性—チームワーク能力の構成要素に着目して— 教育心理学研究, 64, 118-130.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計9件)

- ①小川一美・太幡直也・松本明日香、社会的スキルトレーニングの成果を高める要因の検討 (3) —トレーニング回数と評価に着目して—、日本教育心理学会第58回総会、2016年10月8日~10日(発表決定)、サンポートホール高松(香川県高松市)
- ②太幡直也・小川一美・松本明日香、社会的スキルトレーニングの成果を高める要因の検討 (2) —トレーニング回数による比較—、日本教育心理学会第58回総会、2016年10月8日~10日(発表決定)、サンポートホール高松(香川県高松市)
- ③松本明日香・太幡直也・小川一美、社会的スキルトレーニングの成果を高める要因の検討 (1) —トレーニングの成果を高める要因の抽出—、日本社会心理学会第57回大会、2016年9月17日・18日(発表決定)、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス(兵庫県西宮市)
- ④Ogawa, K. The effects of nonverbal communication knowledge and self-evaluation of social skills on nonverbal behavior during conversations.

2016 Society for Personality and Social Psychology Preconference: Nonverbal. 2016年1月28日、San Diego, CA, (USA)

- ⑤小川一美・松本明日香・斎藤和志、専攻学問とキャリアの関連を考える授業の効果 (2)—心理学とキャリアの関連を考える授業がコミュニケーション力に及ぼす影響—、日本社会心理学会第56回大会、2015年11月1日、東京女子大学(東京都杉並区)
- ⑥小川一美、心理学におけるコミュニケーション研究—非言語情報に関する知識とソーシャルスキルの自己認知がコミュニケーション行動に及ぼす影響—、日本心理学会第79回大会(自主シンポジウム:話題提供)、2015年9月23日、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
- ⑦Ogawa, K. & Matsuo, T. The influence of nonverbal-cues knowledge and self-evaluation of decoding skills on the accuracy in decoding facial expression. 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. 2015年2月28日、Long Beach, CA, (USA)
- ⑧小川一美・松尾貴司、非言語情報に関する知識が表情解読の正確さに及ぼす影響—解読スキルの自己評価の妥当性検討とともに—、日本心理学会第78回大会、2014年9月10日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)
- ⑨矢崎裕美子・小川一美・斎藤和志、インターンシップ研修における会話量とコミュニケーション力の自己評価、日本社会心理学会第54回大会、2013年11月3日、沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 一美 (OGAWA, Kazumi)
愛知淑徳大学・心理学部・教授
研究者番号: 70345875